

現在能『三井寺』にみる中世期の世相

『三井寺』は「現在能」である。超現実的な存在をシテとする「夢幻能」に対して、現在能では現実世界の人物が登場し、時間の流れに沿って物語が進んでいく。リアルに起こりうるドラマであるだけに、現在能にはその時代の社会的な風潮がそのままに描き出されていく。

現在能であり中世の現代劇でもある『三井寺』も、当時の世情を背景にして成立している。たとえば千満は「我は駿河の国、清見が関の者なりしが、人商人の手に渡り」と現状までの経過を述べている。つまり清見が関（静岡市清見区）に暮らしていた千満は、人さらいによって捕らえられて人商人の手に渡っているという。世の中が混沌としていた中世の時代にあつて、人々は困窮し人心は乱れて、人身売買という所業も横行していたのだった。

東国でさらわれた者は都に、都でさらわれた者は東国に流されることが多かった。東国と都の境界となっていたのが、近江国（滋賀県）の大江（大津市）である。琵琶湖の湖上水運を中心にして、平野部や山間には主要な街道が走り、大津にはそれらの水陸路すべてが集結していく。交通の要所として活況をたかやましていた大江は、商業都市としても発展していた。人身売買という負の商いも、ある時は合法的に公然と、またある時は闇にまぎれて行われていたと思われる。

千満もまた、清見が関から大津へと連れてこられた。ところが千満は人商人のもとから逃れたらしい。大津の大寺の三井寺

ところで「狂い」「狂う」という言葉であるが、能においては病理的な状況をさすのではない。

狂女物の場合の多くが、悲痛な事態に直面し、尋常ではない心持に陥っている。狂女が母親の場合は、行方不明の子どもを探し求めているという状況下におかれている。子が行方不明になる事態とは、これほど不安な出来事があるだろうか。探しても見つからず、疲れきり、氣力を失い、絶望し、放心する。激しい不安から放心へ、一種の忘我状態は正氣と狂氣の境をさまよう。その姿は「狂い」の表れと見なされよう。

『三井寺』の狂女（母）もまた、三井寺へ向かう路傍で「子の行方をも白糸の乱れ心や、狂ふらん」と「子の行方がわからないから、糸のように心が乱れ狂うのだろう」と嘆いている。この謡の後、狂乱を表すカケリの働事を舞う。カケリとは、精神状態の不安定さを表すもので、所作と囃子は途中でテンポが急激に変化する。

「狂い」はシテの立にも表れる。手に持っている籠は狂女物を象徴する「狂い籠」である。狂女は旅をさすらう。装束は旅姿などを表現する水衣の肩上げ。さらに今回の「廣田鑑賞会能」で演じられ『三井寺』には小書「笠之伝」がつき、前後後場ともに狂女は道中を表す笠を着けている。

あるいは「狂う」とは、芸能そのものをさすことがある。古代中世における「芸能」という言葉には、憑依とも言えるトランス状態が含まれていた。

『三井寺』では、能力が狂女を見て「面白う狂うと言ふか。さてさてそれは見たいものぢや」と「狂い」を見世物として扱っている。「面白く狂う」とは、強い感情や感動などを歌や舞などの芸能に転化させ、昇華させる境地を見せることではないだろうか。『三井寺』の狂女を感動させたのは、琵琶湖の湖上の月であり、三井寺の鐘の音であった。

（園城寺）に、みずから助けを求めたのだろうか。三井寺の住僧は「行方も知らぬ人にて御入り候が、愚僧を頼む由、仰せ候程に、師弟の契約をなし申して候」と語る。「行き先の知れない人が寺に入ってきて、住僧である私の弟子にしてほしいと頼むので、師弟の契約をした」と説明しているのである。つまり千満は三井寺の稚児となっていたのだ。

当時の稚児とは、天台宗や真言宗などの大寺院において、剃髮しないで修行をする少年僧をさしていた。戒律で「女犯」を禁じていた寺院では、稚児が恋愛の対象になることもあった。稚児を扱った御伽草子の代表作『秋夜長物語』は、比叡山延暦寺の僧と三井寺の容姿美麗な稚児との熱愛の悲話である。ほかに三井寺における稚児の存在をしめす史料は多く、千満が三井寺の稚児であるという設定は、すでに世に承知されていたと思われる。

中世の世相のひとつとして現れる人商人と稚児であるが、能という芸能に取り上げられたのは、当時の人々の感情を揺るがす存在であつたからではなかったか。現在能『三井寺』の舞台のもとには、中世の社会的な眼差しがあつたのだ。

狂女物『三井寺』の母の「狂い」とは

現在能の中に「物狂能」というジャンルがある。愛する人との別離に狂乱状態となつたシテが、その人を探し求めて、やがて再会するというストーリー構成をとる。『三井寺』のようにシテが女性である物狂能の部類を「狂女物」と呼ぶ。

「月の能」母の詠嘆は詩歌づくしにて

『三井寺』は「月の能」「鐘の能」と評される。月と鐘をあまりにも賞賛するがゆえに「子を探す母の実相が希薄になっている」と言われるほどである。

狂女が三井寺に着いてからの謡は実に優美で、流麗な旋律にのって古今東西の詩歌をちりばめた美文でつづられていく。たとえば、三井寺の住僧らが十五夜の月見をしている場に到着した狂女の謡は「折しも今宵は三五夜中の新月の色、二千里の外の故人の心、水の面に照る月なみを、数ふれば、秋も最中夜も半ば、所からさへ面白や、月は山風ぞ時雨に鳩の海、風ぞ時雨に鳩の海」。

まずは中唐の詩人の白居易の詩「三五夜中新月色 二千里外故人心」を詠み込み、続いて源順の屏風歌「水の面に照る月なみを数ふれば今宵ぞ秋の最中なりける」に基づく詞章。さらに「二条良基の連歌の発句「月は山風ぞ時雨に鳩の海」で結び、漢詩と和歌、連歌を綺羅のごとく列しられている。

しかしこの詩歌の選に、子を想う母の気持ちは皆無であろうか。白居易は遠方に左遷された親友を思つて「十五夜の満月の光を、二千里も離れた所にいる友はどんな心で仰いでいるのだろうか」と詠じているのだが、母もまた、同じ月をとこかで見ているのである。千満を案じているのかもしれない。琵琶湖に映る月を眺めて「さざ波の水面に照り映る月。月日を数えてみると、今宵は秋の最中の十五夜であつたなあ」という源順の歌には、千満を探して幾年月を送り、幾夜を重ねたことであろう母の姿がしのべないか。「二条良基の句を「月は山の端に照っているが、風は時雨のような音を立てて吹いている」と反語法的に解してみたいのである。

鐘を撞くのを「許し給へや」

能力は「背東大寺、成平等院、声園城寺」と「大きさは東大寺、姿は平等院、音は園城寺」と天下の三銘鐘を讃えて、後夜の鐘を打ち鳴らす。発する擬音は「ジャンモン、モンモンモン」。「ジャン」とは鐘を撞いた時の音であり「モンモンモン」とは鐘のうねりの音波である。狂言方の声技によって、満月の光輝く湖面に、鐘の響きの余韻が広がり、鐘の音色が一層冴えわたる場面だ。

えも言われぬ鐘の音を耳にして、狂女は鐘を撞きたいと願う。謡に「この鐘は秀郷とやらの龍宮より」とあるように、三井寺の梵鐘には平安中期、俵藤太秀郷が三上山の百足を退治した謝礼に、琵琶湖の龍宮の龍神より授かった秘蔵の鐘を、三井寺に寄進したものだという伝承がある。狂女は「龍宮の龍女が仏法を悟って成仏したという縁に任せて、女人の私も鐘を撞くのだ」と言い出す。

さらに謝観の漢詩の二句「夜登庾公之樓 月明千里」を例にして「庾公の高樓へ登り、月に詠じているように、鐘樓に登って鐘を鳴らすことを許してほしい」と頼む。しかし住僧は「それは心ある古人の事、狂人の身として鐘を撞くべきかと許さない。狂女はある詩人の逸話を語り出す。「詩作に悩んでいた詩人が、名月に向かつて心を澄ましてみると、名詞句を完成することができた。詩人はあまりの嬉しさに心が乱れて、高樓に登り鐘を撞いた。それを人々が咎めたと、詩人は、これは詩狂」と答えた。かほどの聖人であっても月に心乱れるもの。ましてや拙い狂女の私なのだから」と説いて、鐘を撞く。一曲のクライマックス、『三井寺』の狂乱の極点「鐘之段」が演じられるのだ。

心のままの舞と心のリアル

狂女は鐘の撞木に結ばれた紐を手にする。「初夜、後夜、晨朝、入相に撞く鐘の響きは、それぞれに、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」と響く。悟りへと導く鐘の音は、百八の煩惱の眠りから目を覚まさせて、世の迷いをつきはてさせる。私もまた五障の迷いの雲が晴れた。真如の月の光を眺めながら夜を明かそう」と謡うのである。湖上に映える月と三井寺の鐘との取り合わせの風情は、煩惱の闇夜を照らす月と、この世の無常を説く鐘との真理であったのか。

狂女はありのままの月を眺めて鐘の音に身を任せているかのようだ。着座したまま漢の長樂宮、高砂、初瀬（長谷寺）難波寺（四天王寺）の鐘の名所を数え、恋人との逢瀬をしのはせる鐘の歌などをつづつていく。さらに「霜天に満ちて冷しく江村の漁火もほのかに半夜の鐘の響きは、客の船にや、通ふらん」と中唐の詩人の張繼の詩「楓橋夜泊」に基づく謡につて、心のあるがままに舞う。

舞い終えた狂女は「かやうに狂ひ廻れども、我が子に似たる人だにもなし、あら我が子恋しや候」とうち沈む。無心に舞っていた狂女は、我が子への執着に立ち返つたのだ。この狂女の言葉は、金剛流と金春流以外の流派の謡にはない。他流では、舞の後すぐに「いかに申すべき事の候」という千満の台詞にはいり、物語は急展開をみせる。金剛流ではこの狂女の言葉によって、叙情にひたつていた舞台と見所を、現実の社会に引き戻していく。

ひとときの放下と、繰り返す執着の輪廻。最愛の人を見失ったゆえの「狂い」と、風光への感動が極まったゆえの「狂い」の交差。揺れ動く人間の心のリアルが、文芸の綾なす詩情の能『三井寺』に、命の生々しさを潜りこませていくのである。